

目次／表紙 企画展「すこやかであるために―円環する生・老・病・死―」
／p. 2-3 いわて文化ノート「考古学者はなぜ墓が好きなのか―現代日本
考古学入門」／p. 4-5 展覧会案内「企画展 すこやかであるために―円環
する生・老・病・死―」／p. 6 活動レポート「南西諸島への調査出張で出会っ
た動物たち」／p. 7 トピック展「岩手の川と釣り文化」／事業報告「テーマ展
「石を愉しむ展覧会」関連ワークショップ」／p. 8 インフォメーション

第74回企画展

「すこやかであるために―円環する生・老・病・死―」

令和8年6月20日(土)～8月16日(日)

場所：2階 オザワ工業ギャラリー(特別展示室)



岩手に生まれ、岩手に生きた先人たちが、どのように生命と対峙してきたのか。
その心の葛藤や安堵を物語る伝承の一端をご紹介します。

■いわて文化ノート

考古学者はなぜ墓が好きなのか—現代日本考古学入門

考古部門 主任専門学芸員 金子昭彦

「考古学は土器や石器、年代ばかり。生活を研究しようとしなさい」。柳田国男以来、同じ歴史学の仲間である民俗学者から、日本の考古学は批判され続けています。なぜ土器と年代を研究するかについては、本誌 No.186 (2025.9) で詳しく説明しました。(相対)年代自体を自分たちで判断せねばならぬ先史考古学者にとって、形や模様に流行の変化が表れやすく、こわれやすいためどんどん作り替えられ刻々と流行が変化する土器は、うってつけだからです。

石器についてはどうでしょう。土器の発明は2万年以上遡らないので、それ以前の古い時代を研究するには(化石人骨以外には)石器しかありません。実際には、木、骨や角の道具もありましたが、特に火山灰性土壌しゅうの日本では、有機質のものは時間が経つとほとんどとけてなくなってしまうのです。こうした事情は、その後の時代も同じなので、何のことはない、(特に古い時代には)石器や土器しか資料がないので、日本ではこれらを研究するしかなかったのです。

石の道具は、その後金属(主に鉄)の道具に代わります。石の道具は、木を切ったり、土を掘ることが苦手でした。重いだけで、地面を掘り起こせないのです。

縄文時代の後半には、溝のように細長い落とし穴があります(写真)。深さは十分ありますが、狭いので(底はさらに狭く人も立てないほど)逃げられてしまうと思いますが、手のない鹿は落ちたら上がれないのだそうです。なぜか長い方の両端はオーバーハングしているものが多く、私は、溝のように細長い形も含め、長い棒で地面を斜めにつついて掘った結果と考えています。石器より尖った棒でつついた方が土を掘りやすいからです。

しかし、「そんなことを言っても証拠

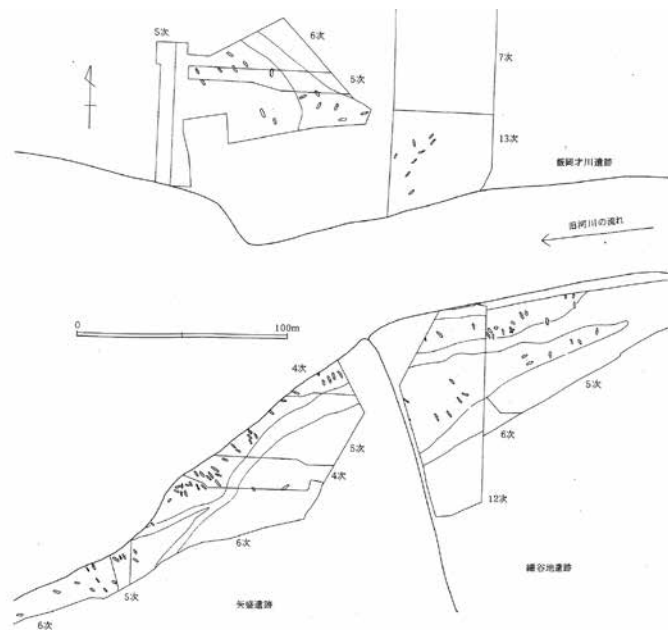
がない」と考古学者からは一蹴しゅうされてしまいます。縄文時代の掘り棒自体は青森県などで出土していますが、それで落とし穴を掘ったという証拠はないからです。石や土器などの圧倒的な存在感のためか、考古学者は証拠に大変厳しいのです(重すぎて「動かせない事実」)。確かに、「犯罪捜査」で最後に物を言うのは物的証拠です。しかし、「物証」は、あくまで裏づけであって、捜査は「推理」に基づいて行っているはずで、それなのにあまりに証拠に厳しいため、「生活」などというあやふやな分野に手を出にくく、下手に手を出すとたちまち総スカンを食らうのが日本の考古学の現状です。でも、「自白」がなければ最後の犯人特定までなかなか到達できないことも確かでしょう(逮捕ではありません、冤罪もあります)。しかし、考古学が「自白」を望むことはできません。人がいなくなった世界を相手にしているからです。



(公財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター 写真提供

縄文時代後半の落とし穴

調査途中で、中央を橋状に掘り残しています(埋まり方を見るため)。底から水がわいています。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
第508集より

盛南地区寿司店交差点付近に確認された落とし穴群

東西方向に今道路になっている部分には、今の県環境保健研究センター方向に向かって当時川が流れていたそうです。水を飲みに来る鹿をつかまえるため、けもの道に沿って多数の溝状の落とし穴が掘られていました。直線による囲いは、各調査次の調査範囲を示しています。

■考古学者はなぜ墓が好きなのか。

“人がいなくなってモノだけ取り残された世界”というのは、まるでSF小説ですが、考古学者が対象としているのはそうした世界で、さらに、これまで述べたように有機質の物（人も該当します）はなくなってしまった世界です。その残骸から、そこで行われていた人の活動（生活）を正確に復元できるのでしょうか。

しかし、考古学でも、“人がいる”状態で研究できる分野があります。有機質の人骨でも、条件によっては残存するからです。墓では、人骨と副葬品から被葬者の人となりや身分が推測できることもあります。歴史学のような特定の個人を扱うことの難しい考古学にとっては稀有なことです。墓には“文脈（脈絡）”があり、モノだけではわからない事もわかったりします。例えば、それだけでは何だかわからない小さな白のような土製品が、人骨の耳のあたりから対になって出土すれば、耳飾りだとわかります。この他にも墓からわかることは非常に多く、だからこそ考古学者は墓が好きなのです。

■考古科学の台頭

ところで、文書や絵巻物などから“読み取る”歴史学（文献史学）、話を“聞く”民俗学と違って、考古学の資料はモノなので、当然物理学などの自然科学的分析が可能です。例えば、人骨コラーゲンの安定同位体測定による食性分析で、その人骨が何を食べて作られたのかわかるようになりました。炭素・窒素安定同位体比によるので、細かいことはわかりませんが、植物・動物および陸産・水産の割合を推定することはできます。これによって、北海道の人が代々水産動物を主に食べてきたことなどがわかりました。

しかし、文系出身である日本の考古学

者のほとんどは、当然ながら、こうした分析を自力で行うことはできません。自然科学者に依頼しているのです。こうしたあり方は古くからおこなわれ、相対でない年代（考古学では新旧という“相対”までしかわからない）を炭素14年代測定法などで測定してもらったりしていたのですが、その主体がかつては考古学の側にあったのが、近年では微妙になってきています。というのも、自然科学的手法でできることが格段に増え、ついていくのも難しくなってきているからです。

近年では、学会発表の多くが考古科学に関するものとなり、考古学者は、研究の主体者ではなく、出土層位や相対年代を伝えるだけの“研究協力者”になってしまっているとも言えるかもしれません。上述のように、元々考古学者自身が、あやふやな解釈を良しとせず確実な証拠を追い求め続けてきた結果ですから、仕方ありません。まさに“母屋を取られる”状態で、考古学に残ったのは、ほぼ、型式編年に基づいて新旧という相対年代を明らかにすることだけでしょう。

■発掘調査は考古学者だけ？

ところで、岩手県立博物館の現在の考古部門の三人の本属は、いずれも県の埋蔵文化財センターでした。「埋蔵文化財センター」とは、発掘調査報告書を作成する機関です。日本では、文化財保護法により、遺跡が壊される場合には事前に発掘調査をしなければなりません。工事が計画された場合、管轄する教育委員会が試掘調査等で発掘が必要か判断しますが、規模の大きな発掘が必要になった場合には、専門機関である埋蔵文化財センターが請け負うことが多いのです。三人とも、埋蔵文化財センター時代には、大量の出土品や多数の住居跡などの遺構に悲鳴を上げ、期限に迫られていました。

県立博物館でも小規模な発掘調査をします。前述の工事の事前調査である「行政調査」と違い、学術目的の調査です。しかし、試掘調査によって初めから出るのがわかっている行政調査と違い、なかなか“当たりません”。本誌No.185（2025.6）の高木レポートを御覧ください。昨年度も一戸町の遺跡を調査しましたが、ハズレでした。出るのが当たり前前の三人にとって二年続けてハズレというのは驚きで、熊が出ないのはよかったのですが、出たのは汗と疲れくらいでした。それでも発掘は楽しく、こんな作業を愉しめるのは考古学者くらいでしょう。

■発掘調査は宝探しではない

そして、考古科学の分析に耐えうる資料を精度の高い発掘調査で取り出せるのも、考古学者だけでしょう。発掘調査は、考古学者にとって、喜びであるとともに“存在意義”になりつつあります。

発掘調査を“宝探し”と同じだと考えている方は多いと思いますが、そうではありません。時期と用途を見すえていることもあり、出土状況をよく確認・記録し、丁寧に現在に近い新しいものから順に掘り下げていきます。地層は、新しく積もったものから古いものへとがしていきます。竪穴住居跡が重複していることも多いのですが、その場合も一つ一つ新しいものから古いものの順に調査していきます。丁度タイムマシンでゆっくり過去を遡っていくようにです。この間も、その都度丁寧な記録を残していきます。行政調査を“記録保存”と呼ぶのは、まさにこのような行為を示しているのです。記録は、やがて発掘調査報告書として公開されます。その場所にどのような時代の遺構・遺物があったのか復元できるような精度の高い報告書です。

■展覧会案内

企画展「すこやかであるために—円環する生・老・病・死—」

会期：令和8年6月20日(土)～8月16日(日) 会場：オザワ工業ぎゃらりー(特別展示室)



江戸時代後期の蘭方医・佐々木中沢(現一関市出身)が刑死した女性を解剖したときの記録「存真図版(写本)」

東北大学附属図書館 蔵



医療者が少ない地域で無資格産婆「コナサセ」として活動した女性の仕事道具(一部)／県指定有形民俗文化財

二戸市教育委員会(二戸歴史民俗資料館) 蔵

この世に生命を授かった私たちは、年を重ね、やがて死を迎えます。その過程には予期せぬ病気や受け入れがたい老いの現象、大切な人との別れなど、幾度となく心が揺れる瞬間が訪れます。特に仏教では生・老・病・死を「四苦」といい、人間の根本的な苦しみと説きます。

こうした苦しみと向き合いながら、日本では古くから健やかな成長と長寿、そして安らかな最期を願うさまざまな習わしが行われてきました。

この企画展では、岩手に生まれ、岩手に生き、岩手で亡くなった先人たちが、どのように生命と対峙してきたのか。その心の葛藤や安堵を物語る伝承の一端を展示紹介いたします。

■はじめに～日本人の身体観

日本では中国古来の「五臓六腑」と呼ばれる身体のしくみが長く信じられてきました。しかし、江戸時代になると西洋の医学書や最新鋭の科学技術が流入し、これまでの伝統医学と異なる実証的な知識が広まっています。

企画展の始まりは、日本初の西洋医学書の翻訳「解体新書」(岩手医科大学蔵)や、日本初の解剖記録「蔵志」(東北大

学附属図書館蔵)、天然痘ワクチンの接種に用いた医療器具「種痘用具」(一関市博物館蔵)など、医学界の転換期となった江戸時代中・後期を象徴する資料を中心に紹介します。

■第1章 生まれるとき

岩手には安産・子授け、子育てのご利益で信仰を集める神さま・仏さまがたくさんいます。県北部は子安さま、県中部は金勢さまや松林地蔵さま、県南部は山の神さまが代表例として挙げられます。

命がけと言われる出産。現在より妊産婦死亡や死産、そして乳児死亡のリスクがはるかに高かった時代は、必死の思いで神仏へすがったことでしょう。第1章では生命の誕生にまつわる信仰や、医療者が少ない地域で多くの赤子を取りあげた無資格産婆の活動などを紹介します。

また、ここでは先人たちが経験した生み育ての苦悩にも触れます。盛岡市内の曹洞宗寺院・正覚寺に「世不見地蔵尊」と呼ばれるお地蔵さまが祀られています。この世を見ずに亡くなった赤子の霊を供養するために造立されたと伝わり、間引き地蔵尊とも呼ばれています。厳しい自然環境に立地する岩手は、何度も深

刻な食糧難を経験してきました。飢饉や凶作に疲弊する人々は、口減らしのために生まれたばかりの赤子を「戻す・返す」選択を迫られる場合もあったようです。こうした行為を禁じたり戒めたりした資料もまたいくつか現存しています。

■第2章 老いるとき

平泉町の天台宗寺院・毛越寺境内の常行堂では、毎年正月20日に守護神・摩多羅神の祭りが行われています。その結願行事として、千秋万歳を寿ぐ古式ゆかしい延年の舞が奉納されます。

人はさまざまなかたちで長寿を願い長寿を祝うと同時に、年を重ねることで経験する身体機能の変化に抗おうとしてきました。第2章では先人が老いや長寿をどのように捉えていたかを示す資料を紹介します。

「人生七十古来稀」とは、唐の時代の詩人・杜甫が詠じた詩の一節です。男女ともに平均寿命が80歳を越えた現代、長寿の節目として祝った還暦も、古稀と呼ばれる70歳も人生の通過点となりつつあります。第二の人生を過ごすヒントを見つけていただければ幸いです。



老いの変化を表現した「老人六歌仙図」
花巻市博物館 蔵・写真提供



手の病気平癒を祈願したと思われる絵馬
北上市・千手観音堂 蔵



女性像のみに女兒の戒名が墨書された対の木像
遠野市・西来院 蔵

■第3章 病めるとき

体調異常を引き起こす病の原因が判然としない時代を生きた先人たちにとって、その脅威は計り知れないものであったことでしょう。しかし、その正体を見極めなければ対抗策を講じられず、病と向き合うこともできません。第3章では医学が発達する以前に創出された病の原因、さまざまな症状に対応した神仏の伝承、おまじないなどを中心に紹介します。



虫歯を治すまじない「虫歯治法」
岩手県立図書館 蔵

また、カップ伝来の秘伝薬「横田膏」製造道具（陸前高田市立博物館蔵）の一部を展示公開します。本資料は東日本大震災津波で被災しました。しかし、多くの方々の手で修復が行われ、被災前と変わらぬ姿を取り戻しています。このたび、20年ぶりに当館での展示が実現し

ます。資料の中にはデータが欠落し用途がわからなくなったものも含まれます。どのような製造工程で使用したものか、展示会をきっかけに判明することを願って出品する予定です。

※遠野市・松崎観音堂の撫で仏「賓頭盧尊者像（ピンズルコ）」（西教寺蔵）は8月2日までの公開となります。8月上旬のお祭り前にお返しする予定です。

■第4章 亡くなるとき

大切な人を失う悲しみは、簡単に癒えるものではありません。遺された者は懇ろに故人を弔い、死後の幸福を願うことで悲しみと向き合ってきました。この背景に、「死」をも人生の通過点と捉えようとする日本人の死生観が伺えます。

最終章では、故人の姿を投影した人形（遠野市・西来院蔵）や板絵（紫波町・極楽寺、遠野市立博物館蔵）、口寄せというかたちで故人の想いを伝えた宗教者の道具（西和賀町・碧祥寺博物館蔵）など、特徴的な品々を展示します。また、葬送や盆行事を中心に、広い県土をもつ岩手ならではの習俗の多様性を紹介します。

※「九相図」（盛岡市・永泉寺蔵）は8月2日までの公開となります。お盆期間は本堂で展覧されます。

■さいごに

展示会では、間引き習俗や飢饉などに関係し、死者の姿を描いたセンシティブな資料も一部出品します。ただ過去を否定するばかりでなく、資料を通じて当時の社会環境に想いめぐらせ、その時代に生きた先人たちの心情をくみとってほしいと願っています。

（民俗部門 川向富貴子）

【関連事業】企画展関連事業として、考古学・歴史学・民俗学の専門家による講演会、旧沢内村を舞台とするドキュメンタリー「自分たちで生命を守った村」（深澤晟雄の会フィルム提供）の特別上映、当館学芸員による展示解説会を予定しています。また、岩手県内で活動する助産師さんとの交流の場としてワークショップ「手から手へ 知恵を伝える SANBARoom in 県立博物館」を開催いたします。詳細は8ページのインフォメーションをご覧ください。

■活動レポート

南西諸島への調査出張で出会った動物たち

生物部門 専門学芸調査員 高橋 雅雄

博物館の学芸員にとって、専門的な調査研究は最も重要な業務の一つです。博物館の調査研究というと、収蔵庫にこもって山のような多数の資料と日夜格闘しているイメージをお持ちかもしれませんが、化石・岩石や動植物を採取したり、遺跡を発掘したり、民俗芸能を取材したりと、野外調査をかなり多く実施しています。時には岩手県を越えて日本全国、さらには国外でも実施する必要が生じ、長い調査出張になることもあります。私はヨシ原などの湿性草原で暮らす鳥たちの越冬状況について研究を続けているため、毎冬に計3週間ほどの調査出張を申請して、日本各地で野外調査を実施してきました。最近では南西諸島が主な調査地域で、2025年度冬には沖縄諸島（沖縄本島・伊平屋島）と先島諸島（宮古島・石垣島）を訪問しました。結果はまだ詳しく紹介できないので、ここでは調査で出会った印象的な動物たちを紹介します。

■沖縄本島～伊平屋島

南北に細長い沖縄本島の北部、美ら海水族館で有名な本部半島から沖縄県最北端の伊平屋島へ渡るフェリーが発着しています。往復の船旅は珍しい外洋の動物と出会えるチャンスで、期待を胸に展望デッキに陣取って海を眺め続けました。けれども往路は強風で波立ち、全く何も見つからず…。野生の動物たちは簡単には姿を現してくれません。

翌日の復路は風も波も無く、穏やかな海上をフェリーは進みます。否応なく期待が高まりましたが、やっぱり何も出ず。そんなしょげた時に、遠くに白い噴煙が立ちました。慌ててカメラを向けると、大きな尾がせり上がり、海中へゆっくりと沈んでいきます。長く憧れていた、大きなクジラとの初めての出会いでした。

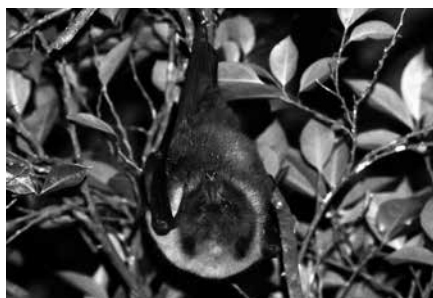


ザトウクジラ

沖縄本島周辺は多数のザトウクジラが出産・子育てのために冬に集まる海域で、注意深く探すと岸边からもクジラの姿を見ることがあるそうです。私が出会ったクジラもその1頭だったのでしょう。

■宮古島

宮古島は起伏に乏しい平坦な地形で、大部分はサトウキビ畑が広がっています。人口は6万人ほどで、近年は観光客や移住者が増えているそうで、繁華街やリゾートホテル周辺は大賑わいでした。一方で従来の自然環境はほとんど残されておらず、まとまった森林は島北部の大野山林しかありません。夜行性の動物を求めて、夕方にここを訪れてみました。



ヤエヤマオオコウモリ

縦断する林道を歩き始めると、近くの木々から大きな影が次々と飛び立ちます。樹上からキーキーと大声が響き、何かがガサゴソと動き回っています。声のあたりをライトで照らすと、そこにはたくさんのヤエヤマオオコウモリが枝にぶら下がり、花や果実をむしゃむしゃと食べていました。岩手県には昆虫食の小型コウモリ類しかいませんが、南西諸島や

小笠原諸島には大型のオオコウモリ類が生息し、熱帯・亜熱帯地域に豊富な果実を主食に暮らしています。キツネのようなかわいい顔が印象的でした。

■石垣島

日本最西端の八重山諸島は石垣島・西表島・与那国島などから成り、特に石垣島は人口5万人ほどの最も栄えた島です。南側の平地には田畑や牧場が広がりますが、北側の山地には深い森が広く残されていて、多種多様な野生生物が暮らしています。その中で最も象徴的な鳥と言えば、ボクサー具志堅用高のニックネームから有名になったカンムリワシでしょう。大きさはカラスくらいなのでワシを名乗るのはいかがなものかと思ってしまうのですが、英名でもCrested Serpent Eagle（冠がある、ヘビ食いワシ）と呼ばれています。彼らは石垣島や西表島の深い森の中に生息していますが、石垣島では田畑にも住み、その姿を比較的簡単に見つけることができます。警戒心が無く、時に交通事故にあって命を落としてしまうそうです。私が出会ったカンムリワシの1羽もやはり道路のそばにいて、電線にとまって地面の獲物を探していました。真下から見上げると私を不思議そうに見降ろし、それでも特に気にする様子はありません。八重山諸島の王者は体が小さくとも、王者の風格を持っていました。



カンムリワシ

■事業報告

トピック展「岩手の川と釣り文化」

会期：令和8年2月17日(火)～3月15日(日)、町家物語館DOMAにて3月19日(木)～3月22日(日)

日本の各地域には、川の流れや魚と季節に合った釣り竿や釣り方が伝わってきました。川釣りという遊びの文化にも、地域の伝統技術は脈々と受け継がれています。盛岡にはイワナやヤマメなどを釣る和竿「盛岡竿」があり、川の流れを利用した「盛岡式流し毛鉤」という独特な仕掛けがあります。このトピック展では、研究と実釣実験の成果を紹介しました。

岩手県立博物館と岩手大学は共同で2024年度から、川釣りの道具とそれを楽しむ文化について調査を進めてきました。

岩手大学理工学部の田中隆充教授は、3Dプリンタでさまざまなウキを造形し、実際の河川で使いやすさや釣果を検証しました。また、小笠原敏記教授は、

大学構内の水理実験場で3Dプリンタ制作ウキを流して検証し、計測データからウキの流れ特性について数式を割り出しました。それらの結果を元に新しいウキを創作し、特許庁へ意匠出願しました。

岩手県立博物館では、石澤和竿毛鉤工房にて盛岡竿の製作工程を記録し、技術の特徴と川釣り文化の歴史を調べました。また、調査を進める中で、『飢饉考』などの著作で知られる横川良助が随筆『四季の美濃笠』を記したことが分かりました。本書は釣りへの深い知識と情緒のある表現を備える貴重な史料です。

会期中の3月8日(日)には、シンポジウム「盛岡竿と盛岡式流し毛鉤—岩手の川釣り文化—」を開催し、約80名もの参加者がありました。職人の感覚

は科学的なデータとして継承できるかなど、今回の研究を科学的な見地から継承する試みについて、竿職人の三好幸喜氏からもご意見をいただきました。また、質疑応答では具体的な釣法などについて、たくさんの情報が寄せられました。

今後もこの伝統を継承する一助になるよう、調査研究を進めてまいります。



※本事業は、公益財団法人 水・地域イノベーション財団の助成によるものです。

(民俗部門 近藤 良子)

■事業報告

テーマ展「石を愉しむ展覧会」関連ワークショップ

令和8年1月24日(土)

テーマ展「石を愉しむ展覧会」は、3月8日に閉幕しました。真冬の会期にも関わらず、たくさんの方々にご観覧いただきましたこと厚く御礼申し上げます。1月24日(土)には、関連イベントとして2つのワークショップを開催しました。講師には、日本画家の花立ゆかり氏をお招きしました。

午前中は「岩絵具で描く絵馬づくり」と題し、ご予約頂いた10名の方にご参加いただきました。赤鉄鉱と孔雀石を砕いた岩絵具を用いて、今年の干支である午を絵馬に描きます。岩絵具はその粒子の細かさで色合いが異なります。同じ岩絵具でも粗い粒子は色が濃く、細かくなるにつれて明るい色になります。その違いを利用することで作品に奥行きや変化

が生まれてきます。描き上がった作品は、同じ構図でも一人ひとりのオリジナルティが溢れる作品に仕上がりました。



午後は、「日本画の絵具でお絵描き体験」として、水干絵具で和紙に色付けを行う体験会を開きました。水干絵具とは貝殻を細かく砕いた粉に染料で色をつけた絵具です。これを動物の骨や皮を煮だした膠を接着剤として用いて、和紙に絵を描いていきます。お子さんから大人ま

で延べ30人程の方にご参加いただきました。みなさん「体験」とは思えないほどに真剣に取り組んでいただき、その本格的な出来栄には驚かされるほどでした。



ワークショップを通して、石と日本画の関わりや魅力が伝われば嬉しく思います。たくさんのご参加ありがとうございました。(地質部門 佐藤修一郎)



岩手県立博物館

IWATE PREFECTURAL MUSEUM

インフォメーション 〈令和8年6月1日～令和8年9月30日〉

お知らせ

- 資料整理のともなう休館
資料整理のため、9月1日(火)～9月10日(木)は休館します。
- 敬老の日
9月21日(月・祝)の敬老の日は、65歳以上の方の入館料を無料とします。

展覧会

- 企画展「すこやかであるために―円環する生・老・病・死―」
令和8年6月20日(土)～8月16日(日)
会場：2階・オザワ工業ギャラリー(特別展示室)
岩手の人々がいかに生命と向き合ってきたかを概観します。
- ◆展示解説会 当日受付・要入館料 いずれも14:30～15:30
8月1日(土)、8月7日(金)
- ◆企画展関連日曜講座 講堂 13:30～15:00 当日受付・聴講無料
6月28日 講師：井上雅孝氏(滝沢市埋蔵文化財センター)
7月12日 講師：中村安宏氏(岩手大学人文社会科学部)
7月26日 講師：加藤和夫氏(深澤晟雄の会)
8月9日 講師：羽柴南枝氏(奥州市教育委員会)
詳細は県博日曜講座の欄をご覧ください。
- ◆企画展関連講演会 講堂 13:30～15:00 当日受付・聴講無料
7月20日(月・祝)「民俗芸能と祈り」
講師：岩館岳氏(紫波町教育委員会)
- ◆ワークショップ(民俗講座)
「手から手へ 知恵を伝えるSANBALルーム in 県立博物館」
7月25日(土)10:00～15:00
詳細は当館ホームページをご覧ください。
- ◆企画展関連ミュージアムシアター 講堂 当日受付・観覧無料
「自分たちで生命を守った村」(実写/35分/一般向け)
8月1日(土) 1回目13:30～ 2回目14:30～
- テーマ展「化石のレプリカ展 ―We are NOT fakes!―」
令和8年9月26日(土)～12月6日(日)
会場：2階・オザワ工業ギャラリー(特別展示室)
いろいろな化石のレプリカが大集合! 観て触って楽しむことができる展覧会です。

県博日曜講座

- 第2・第4日曜日 13:30～15:00 当日受付 聴講無料
当館学芸員等が岩手の文化や歴史、自然について解説します。
- *展覧会関連講座
6月14日 「考古学者はなぜ墓が好きなのか ―企画展へのはなむけ―」
講師：金子 昭彦(当館学芸員)
- *6月28日 「死生観について考古学者が知っている二、三の事柄 ―墓・葬送・他界観―」
講師：井上 雅孝氏(滝沢市埋蔵文化財センター)
- *7月12日 「生と死への向き合い方 ―中尊寺供養願文と即身仏―」
講師：中村 安宏氏(岩手大学人文社会科学部)
- *7月26日 「住民の力を信じた村長 深澤晟雄 ―沢内村の生命尊重行政―」
講師：加藤 和夫氏(深澤晟雄の会)
- *8月9日 「追憶の肖像 ―死者を描くこと―」
講師：羽柴 南枝氏(奥州市教育委員会)
- 8月23日 「岩手のバイソン(ハナイズモモリウシ)と氷河期の人類」
講師：米田 寛(当館学芸員)
- 9月13日 「岩手の地理あれこれ」
講師：久保 賢治(当館学芸員)
- 9月27日 「津波で被災した紙製資料の修復」
講師：古館 祥子(当館学芸員)

第92回 自然観察会

- 9月20日(日) 9:30～12:00
講師：当館学芸員
会場：滝沢市菓子 滝沢森林公園(現地集合・解散) 料金：100円
対象：一般20名
参加方法：専用の電子メールアドレスまたはハガキで先着順に受付。
詳しくはお問い合わせください。

ナイトミュージアム

- 8月7日(金)・8日(土)16:30～17:30
事前申込制(応募者多数の場合は抽選) 各日定員20名
対象：小中学生と保護者
閉館後の暗い展示室を探検して、いつもと違う雰囲気博物館を体験します。学芸員による分かりやすい解説もあります。
募集期間：令和8年7月16日(木)～7月20日(月・祝)
応募方法：専用メールアドレスに①住所、②参加者全員の氏名、③電話番号を明記してお送りください。(詳細はホームページをご覧ください。)

週末の催し

- ◆ミュージアムシアター
毎月第1土曜日 13:30～15:00頃 講堂 当日受付 視聴無料
○6月6日(実写/110分/一般向け)
「マリッジカウンセラー」(2023年 出演 渡辺いっけい・松本若菜)
○7月4日(アニメ/66分/幼児・小学生向け)
「映画 すみっこぐらし とびだす絵本とひみつのコ」
○8月1日(実写/35分/一般向け)
「自分たちで生命を守った村」(旧沢内村 深澤晟雄村長)
※2回上映(1回目13:30～ 2回目14:30～)
- ◆チャレンジ! はくぶつかん
毎月第2・第3土曜、日曜 小学生向け 随時受付
チャレンジ! マークをさがして はくぶつかんをたんけん!
6月13日・14日・20日・21日 テーマ：ふわふわ
7月11日・12日・18日・19日・20日 テーマ：体(からだ)
8月8日・9日・10日・11日・15日・16日 テーマ：夏(なつ)
9月12日・13日・19日・20日・21日・22日・23日 テーマ：黄(き)
- ◆たいけん教室～みんなのためそう～(事前申込制)
第1・第3日曜日 13:00～14:30
幼児(3歳以上で保護者同伴)・小学生10名程度
さまざまな遊びやものづくり、実験を体験してみよう。
※全プログラム有料です(材料費代/プログラムごと異なります)。
※予約は専用メール(一度に3名まで)で受け付け、応募多数の場合には抽選を行います。詳細は博物館ホームページをご確認ください。

6月	7日 チャグチャグ馬コづくり 21日 土器づくり	7月	5日 ちぎり絵のうちわ 19日 ミニさんさだいで 26日 ミニさんさだいで
8月	2日 化石のレプリカ 16日 手づくり万華鏡	9月	20日 天然石のフォトフレーム

利用のご案内

- 開館時間 9:30～16:30(入館は16:00まで)
- 休館日 月曜日(月曜が休日の場合は開館、翌平日休館)
- 入館料 一般360(170)円・大学生170(90)円・高校生以下無料
()内は20名以上の団体割引料金
- ※岩手県子育て応援バスポート所有者で、バスポートに記載のお子様と一緒に来館された場合は、入館料免除となります。
- ※学校教育活動で入館する児童生徒の引率者は、申請により入館料免除となります。
- ※療育手帳、身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方、及びその付き添いの方は無料です。

岩手県立博物館だより 第189号 令和8年6月1日発行	編集 岩手県立博物館 〒020-0102 盛岡市上田字松屋敷34 Tel. (019)661-2831 / Fax. (019)665-1214 発行 公益財団法人岩手県文化振興事業団 〒020-0023 盛岡市内丸13-1 Tel. (019)654-2235 / Fax. (019)625-3595
-----------------------------------	---